



兵庫県佐用町三日月藩乃井野陣屋跡の次世代への歴史継承

林, 優斗
矢嶋, 巖

(Citation)

兵庫地理, 71:173-189

(Issue Date)

2026

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100504331>



兵庫県佐用町三日月藩乃井野陣屋跡の次世代への歴史継承

林 優斗・矢嶋 巖

I. はじめに

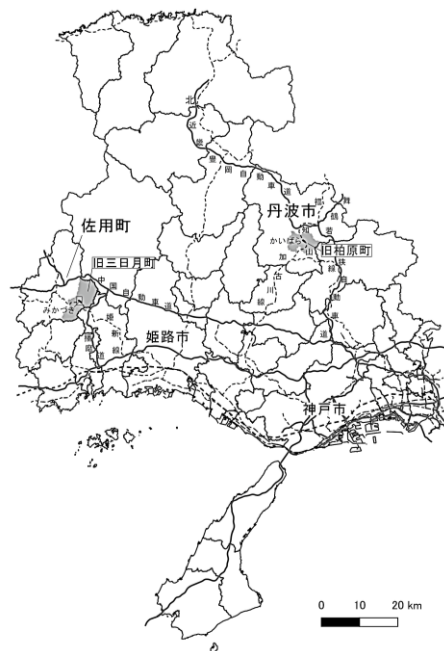
日本各地には、多くの城跡が存在する。このうち歴史的背景において特に注目されることがなかったり、貴重な遺構等もない城跡も数多く存在する。とはいえ、これらの城跡にも、遺構が整備保存され、案内看板が設置されている事例や自治体の博物館などで城跡に関わる展示が行われている事例は多い。こうした城跡の多くは、地域住民にとって誇りある場所として、歴史継承が行われていることが、現地に置かれているパンフレットやチラシなどの発行物から推測できる。

江戸時代の大名の拠点として利用された城跡には、失われた遺構を元に戻す復元が行われていることも多い。こうした城跡では、幕府に提出が義務付けられていた城の縄張りを示す城郭絵図の多くが現存していることが考えられる。特に廃藩置県まで大名の拠点として利用された城跡には、廃城になる前に撮影された写真が存在する場合があります、復元に必要な資料が多いことも理由として考えられる。復元が行われた城跡は、地域の象徴として観光地化され、ニュースや新聞、雑誌、インターネットサイトなどでも取り上げられていることが多い。また、城跡の保存・活用についての研究も重ねられている。

しかし、江戸時代のすべての大名が城を有していたわけではない。土平 (2009 : 65-67) によると、1~3 万石程度の小規模な藩で城持ちではない大名は、政治的、軍事的拠点として陣屋 (大名 (藩) 陣屋) を用いた。中島 (1962 : 1) は、1813 (文化 10) 年に存在した大名 255 家を石高で区分した。このうち、1~3 万石の小規模な大名は全体のうち約 6 割であった。ま

た、城郭研究者の中井 (2021 : 8) によれば、江戸時代の大名 300 藩のうち、約 100 藩が陣屋を拠点としていた。にも関わらず、現在、城跡と違って、陣屋跡を見かける機会は少なく、地域の象徴や誇りとして耳にすることはあまりない。滋賀県内の陣屋跡を紹介した城郭研究者の中井編著 (2021) は、「あとがき」において、陣屋自体の評価が低く、陣屋藩に関係する多くの遺構が失われていることを指摘するとともに、今後も失われ続けることを懸念している。

兵庫県佐用郡佐用町乃井野には、三日月藩乃井野陣屋跡がある (第 1 図)。西嶋建築設計事務所編 (2005 : 1-7) によると、1697 (元禄 10) 年に三日月藩が設置され、三日月藩乃井野陣屋が建てられ、1871 (明治 4) 年の廃藩置県ま



第 1 図 兵庫県佐用町三日月と丹波市
柏原の位置

出所 国土数値情報 (行政区域、鉄道、高速道路データ) (国土交通省) を加工して作成。

注 旧三日月町と旧柏原町の区域は 1995 年時点。

で三日月藩庁として使用された。佐用郡教育委員会編（2004:26-35）、西嶋建築設計事務所編（2005：はじめに, 17-18）によると、1999～2004年にかけて、廃藩置県時に埋め立てられた石垣や堀、移築された建物などが復元・復原され、2005年4月に三日月地域の歴史資料館である三日月藩乃井野陣屋館として開館した。

名城ランキング本である中井編（2010:243）は、パーツ別ランキングとして「陣屋ベスト10」を設けその9位に三日月陣屋跡（三日月藩乃井野陣屋跡）を挙げた。また中井編著（2021：10）は「陣屋の定義」において、三日月藩乃井野陣屋跡の復元・復原された櫓や門などを写真付きで紹介している。

三日月藩乃井野陣屋跡については、西嶋建築設計事務所編（2005）などがその復元整備について報告している。また、中村（2020）は三日月藩の沿革や歴代藩主、陣屋の構造、武家屋敷の復元・復原について紹介した。宇高（2022）は現存する6軒の武家屋敷（旧三日月藩士邸宅）の建築構造について報告した。しかし、以上では、三日月藩乃井野陣屋跡の歴史継承に関しては特に触れられていない。

そこで本研究では、復元・復原され、歴史資料館として開館した三日月藩乃井野陣屋跡を対象とし、陣屋跡の復元・復原の経緯や背景を踏まえた上で、歴史継承の現状を明らかにすることにより、他の陣屋跡と比較して、三日月藩乃井野陣屋跡の整備にどのような意味があるのか、地域の誇りになっているのかについて検討する。最終的には、三日月藩乃井野陣屋跡が、より地域に根差した、地域の誇りある文化財になっていくことを目標とする。

本研究は以下の手順で行う。Ⅱでは、文化財保護法改正による文化財の保存・活用の変化について確認し、先行研究から古代の城跡の復元が地域に与えた影響について明らかにする。そして大名が拠点とした7か所の陣屋

跡の保存・活用と歴史継承を把握した上で、最も歴史継承に力が注がれていると感じられた兵庫県丹波市柏原町の柏原藩陣屋跡における取り組みについて紹介する。Ⅲでは、2005年に復元・復原された三日月藩乃井野陣屋跡の概要を紹介した上で、三日月藩乃井野陣屋跡の復元・復原に関する行政の期待と住民と専門家の評価について述べる。Ⅳでは、三日月地域づくり協議会による三日月藩や乃井野陣屋の歴史継承に関する取り組みやイベントの視察、関係者への聞き取り結果を示す。最後にⅤでは、考察をした上で、三日月藩乃井野陣屋跡が地域の誇りとして歴史継承されることに繋がる方法について検討する。

なお、文化庁（2020）「史跡等における歴史的建造物の復元等に関する基準」によると、今は失われて現位置に存在しない歴史遺跡の建築物・工作物に対して、史跡等の本質的価値を目的とした保存活用の整備には、復元と復元的整備がある。このうち、当時の遺跡の建造物・工作物に基づき規模・構造・形式等から再現することを復元と定義している。当時の遺跡の建造物・工作物に対して、本質的価値の理解促進と利活用の観点から一部を変更して再現したものや、史資料が十分に揃わない場合に史跡等全体の保存及び活用を推進するために多角的に検証して再現することを、復元的整備と定義している。

また、2005年に三日月藩乃井野陣屋跡が復元整備された当時は、復元と復元的整備は区別されておらず、橋・長屋・門の復元整備報告書である西嶋建築設計事務所編（2005）の「例言」によると、復元について「現存しない建物を発掘の遺構にもとづき史料・資料より考察し再現すること。」としている。橋・長屋・門の復元にあたって、三日月藩乃井野陣屋跡の縄張図や移築された建物の写真を参考に、三日月地域周辺の歴史遺産の建造物や日本各地の城跡建造物約20か所を基にしているため（西嶋建築設計事務所編、2005:54-84）、

三日月藩乃井野陣屋跡の復元は、復元的整備に当たると考えられる。また、文化庁では定義づけられていないが、西嶋建築設計事務所編（2005）の「例言」では、現存する建物を修理、修築し、もとの形や位置に戻すことを復原としている。

Ⅱ. 文化財としての陣屋跡

1) 文化財の次世代への継承と課題

文化財保護法第一条では、法の趣旨について「この法律は、文化財を保存し、且つその活用を図り、もつて国民の文化的向上に資するとともに、世界文化の進歩に貢献することを目的とする。」としている。この方針を強化するように、2018年7月に文化財保護法が改正された。文化庁「文化財審議会文化財分科会企画調査会(第1回)議事次第」「資料3 文化財保護法改正の概要について」では改正目的を紹介した上で、「過疎化・少子高齢化などを背景に、文化財の滅失や散逸等の防止が緊急の課題であり、未指定を含めた文化財をまちづくりに活かしつつ、地域社会総がかりで、その継承に取り組んでいくことが必要。」としており、文化財の保存には、地域住民による継承活動が必要と指摘している。

今野・倉原（2023）は、岩手県盛岡市に位置する平安時代の城跡で、3度の復元工事が行われた志波城跡について史跡の復元と地域住民の誇りに関して検討し、志波城跡の歴史を踏まえた上で、整備保存事業の内容や進捗、史跡関係者への聞き取り調査、過去の来場者アンケート結果に基づき、住民の関与の点から史跡整備の課題と在り方を明らかにした。志波城跡や歴史に関心が低い住民にとっては、史跡の価値と復元等の整備の意義が伝わっていなかった。しかし、PRや話題作りの効果、建築物の復元整備などのハードな取り組みだけでなく、展示案内施設や城跡に関係するイベントといったソフトな取り組みを増やしたことにより、地域外からの来場者が増え、マ

スコミやインターネット等で話題になる回数も増え、志波城跡の草刈りなどの維持管理や催事に関わる地域住民が志波城跡を価値ある場所だと認識するようになった。また、「自ら手がけた場所に多くの来場者が訪れ、満足している様子を目にしたことで、次第に愛着が湧き、誇りに感じる地域住民が増えるようになったことで、地域住民の自主的能動的な意識や行動の変化につながった」と今野・倉原は述べている。この事例は平安時代の城跡の復元事例であるが、整備した結果、地域の誇りとなり、歴史継承につながった事例と言える。なお、観光が見込めない場合は、地域住民が史跡の理解を深めるのに役立つ整備を志向する視点も重要であると指摘している。

2) 大名藩陣屋跡と大名

『日本史大事典第四巻』（青木ほか編、1993：579-582）によれば、江戸時代の大名は1万石以上の領主（藩主）を言い、将軍に対して直接奉公を持つものである。うち幕末の1865（慶応元）年まで存在した大名（藩）は266家であった。また、大名には、領国や居城の規模、江戸城内の詰間、官位、石高等の複雑多岐な格式序列が存在していたとされる。領国や居城の規模については、国主、准国主、城主、城主格、無城の五段階に振り分けられていた。このうち、国主、准国主、城主は城を拠点としていた大名である。無城は、城郭に住まず陣屋を持つ大名であり、城主格については、2〜3万石ないし5万石以下の大名で条件によって城主の格式が与えられているにも関わらず無城と同じく城を持つことを許されず、原則として陣屋を構えた大名である。このように大名すべてが城を拠点にはできなかった。

次に、城主格や無城の大名が拠点としていた陣屋とはいかなるものかについて整理する。陸奥国南部の陣屋と陣屋町の形態について研究した土平（2009：66-67）によると、幕府代官（郡代）陣屋、旗本陣屋、交代寄合陣屋、大

名(藩)陣屋、飛地領陣屋の5種類の陣屋がある。このうち、幕府代官(郡代)陣屋、旗本陣屋、交代寄合陣屋は大名以外が使用した。大名(藩)陣屋と飛地領陣屋は大名が使用し、大名(藩)陣屋は、1～3万石程度の小規模な藩で城持ちではない大名の政治的、軍事的拠点であり、飛地領陣屋は、大名が拠点周辺から遠く離れた領地(飛地領)を統括するために建てられた拠点である。このうち、城主格や無城が拠点としていた陣屋が大名(藩)陣屋である。本研究では陣屋と記したものは大名(藩)陣屋を示すものとする。なお、城を有した藩と同様に陣屋を有した藩が各地に存在していた。

3) 陣屋跡の現状

廃藩置県により、城や陣屋は役割を終えたが、城跡の場合は多くが現在も歴史継承されている。では、陣屋跡はどうであろうか。筆者が現地調査を行った7か所の陣屋跡について第1表に特徴を整理したうえで、陣屋跡で発信されているストーリー性について第2表にまとめた。

地域の誇りとして積極的に歴史継承活動が行われていないと筆者に感じられた陣屋跡は、③多度津藩陣屋跡、④西条藩陣屋跡、⑤三上

藩陣屋跡である。これらの陣屋跡では、博物館などで陣屋や藩に関わる展示が行われてはいるが、地域住民による歴史継承活動が積極的に実施されているようには見受けられず、地域の誇りになっているとは感じられなかった。⑤三上藩陣屋跡は私有地となっており、陣屋跡周辺で藩の歴史を伝える看板などを見つけることができず、陣屋跡が位置する自治体の観光ガイドマップ、公式サイトなどでも紹介されていない。この理由として、廃藩置県前の1870(明治3)年に和泉国(現大阪府)に陣屋を移転したことで、多くの藩士が移動したことが考えられ、現在も積極的な歴史継承の動きになっていないと考えられる。

地域の誇りとして積極的に歴史継承活動が行われていると感じられた陣屋跡は、②三田藩陣屋跡、⑥小島藩陣屋跡、⑦柏原藩陣屋跡で、地域住民が一体となり陣屋藩の歴史継承が行われていた。②三田藩陣屋跡は、大阪や神戸などの大都市からのアクセスが良いことから観光客が訪れやすく、歴史継承の取り組みに繋がっている可能性がある。⑥小島藩陣屋跡については、2025年12月20日に現地で

第1表 陣屋跡の比較表

	①玉縄藩陣屋跡	②三田藩陣屋跡	③多度津藩陣屋跡	④西条藩陣屋跡	⑤三上藩陣屋跡	⑥小島藩陣屋跡	⑦柏原藩陣屋跡
陣屋の所在地	神奈川県鎌倉市	兵庫県三田市	香川県仲多度郡多度津町	愛媛県西条市	滋賀県野洲市	静岡県静岡市	兵庫県丹波市
陣屋として使用した期間	74年	238年	44年	230年程?	172年	164年	168年
陣屋跡の現状	△	△	△	○	×	◎	◎
藩に係る関連遺構の現状	△	◎	◎	○	×	◎	◎
自治体サイト等での紹介	△	×	×	○	×	◎	◎
陣屋・藩に関するイベントの有無	△	○	×	×	×	◎	◎
歴史継承活動・団体の有無	◎	◎	×	×	×	◎	◎
博物館・資料館などでの常設展示や企画展展示の実施	○	◎	◎	○	○	○	◎

資料：『藩史大事典』（第2巻、第4巻、第5巻、第6巻）、三田市編さん専門委員（2000：480）、丹波市教育委員会（2008：4）、現地調査を基に筆者が作成

陣屋跡の現状、関連遺構の現状：◎充分保存されている ○ある程度保存されている △あまり保存されていない ×滅失している
その他：◎良く行われている ○ある程度行われている △最低限行われている ×全く行われていない

第2表 陣屋跡で発信されているストーリー性

①玉縄藩陣屋跡	戦国大名北条氏の城館跡に陣屋が築かれたこともあり、城跡や城館跡の歴史継承に比重が置かれる
②三田藩陣屋跡	九鬼水軍の一族が治めた土地であり、旧三田藩士が明治維新時に活躍したことが誇りとして歴史継承がされている
③多度津藩陣屋跡	江戸時代から栄えた港町で、礎は多度津藩による政策
④西条藩陣屋跡	昔ながらの景観が残る町
⑤三上藩陣屋跡	歴史民俗博物館における展示等や企画展以外、陣屋藩に関する歴史継承活動は行われていない
⑥小島藩陣屋跡	城跡級の石垣を持つ陣屋跡が存在し、失われかけた誇りを取り返そうとしている
⑦柏原藩陣屋跡	織田信長の子孫が統治した陣屋藩で、藩校時代からの教育熱心な風土が、陣屋や藩の歴史と共に廃藩置県後も継承され、誇りになっている

資料：現地調査を基に筆者が作成

実施した関係者への聞き取り調査結果によると、城郭規模の陣屋跡であることや遺構の希少性から文化庁が動き、地域住民も陣屋跡の価値に気づいたことで様々な活動を実施しているという。2025年10月には、小島藩陣屋跡のガイドや整備などのボランティア活動を行っているNPO法人小島文化財を守る会のサポートによって、地元の小学生がガイド役を務めたところ、来訪者から良い反響を得たことがきっかけとなって、小学生が陣屋の歴史について熱心に勉強したといい、今後も歴史にまつわる様々なイベントの開催を予定している。小島藩陣屋では、地域住民による歴史継承活動から誇りが醸成されつつあると言える。

①玉縄藩陣屋跡は、戦国時代の大名である北条早雲が築き北条氏の居城として使用された玉縄城跡の城館跡に位置する。玉縄城址まちづくり会議のホームページによると、北条氏の城跡であることを中心として、様々な歴史継承活動が行われており、その中で陣屋藩の歴史についても紹介されている。また、同会議によって建てられた城館遺構の解説看板では陣屋跡の遺構については触れられている程度である。このことから地域住民によって、ある程度は陣屋跡の歴史継承活動が行われているものの、活動の中心は北条氏の城である

と言える。

7か所の陣屋跡の中で地域住民が歴史継承に最も力を注いでいると感じられた陣屋跡は柏原藩陣屋跡であった。

4) 柏原藩陣屋跡の取り組み

(1) 柏原藩陣屋跡、関連構造物の概要

柏原藩陣屋跡は兵庫県丹波市柏原町に位置する(第1図)。同市は、2004(平成16)年に柏原町、氷上町、青垣町、春日町、山南町、市島町の6町合併により誕生し、市役所は旧氷上町に置かれた。福知山線柏原駅は、快速か普通列車が日中でも1時間に1本停車するうえ、特急列車が1日11本停車し、大阪方面からのアクセスが比較的良いといえる。

丹波市教育委員会(2008:2-31)によると、柏原藩陣屋跡は、織田信長の次男である織田信雄の子孫、織田信休が1695(元禄8)年に柏原藩に移封され、柏原藩(後期柏原藩)が復活したことで陣屋が建てられ、1714(正徳

第3表 柏原藩陣屋跡の年表

西暦(和暦)	柏原藩陣屋跡に関わる出来事
1695(元禄8)年	織田信休、宇陀松山藩から柏原藩(2万石)へ移封
1714(正徳4)年	柏原藩陣屋が完成した
1818(文政元)年	火災により、長屋などの1部を残し、陣屋が焼失
1820(文政3)年	陣屋が再建された
1871(明治4)年	廃藩置県、陣屋等の建物は豊岡県が所有
1873(明治6)年	崇広小学校の建物として、県から旧藩庁敷地建築物を購入
1962(昭和37)年	表御門が県指定文化財として登録
1971(昭和46)年	柏原藩陣屋跡が国指定史跡として登録 学校の校舎から文化財となった
1972(昭和47)～ 1973(昭和48)年	表御殿の瓦・檜皮葺替え、内部の復元(復原)が実施
2002(平成14)年	柏原藩陣屋跡整備基本計画策定委員会が設置された
2003(平成15)年	柏原藩陣屋跡の整備基本計画が策定された
2003(平成15)年 ～2011(平成23)	整備方針・環境整備についての検討・協議と表御殿瓦葺替え、檜皮葺替え、環境整備、カイヅカイブキ移植の整備工事が実施された

資料：丹波市教育委員会(2008:2-31)、丹波市ホームページ



第2図 柏原藩陣屋跡表御殿

2025年10月19日林撮影



第3図 陣屋跡前の街路灯

2025年4月26日林撮影

4)年に完成した。廃藩置県後は、陣屋跡の表御殿(第2図)は小学校校舎として利用された。現在、柏原藩陣屋跡は国指定史跡に登録され、長屋門は県指定文化財に登録されている(第3表)。なお、中井編(2010:238)

では、陣屋の長屋門や御殿

が残っていることが貴重であるとし、中井編著(2021:8-9)では、「陣屋の定義」で柏原藩陣屋跡の表御殿が唯一現地に残っている事例として写真付きで紹介している。

柏原藩陣屋跡の表御殿や長屋門は一般公開されていて、丹波市ホームページ「丹波市立柏原歴史民俗資料館・田ステ女記念館」によると、後述する資料館の入館券購入により御殿内も見学でき、大人210円、中高生100円、小学生50円と低額に抑えられている。筆者の視察によると、表御殿内部は、書院上の間、上段の間などが当時の形状で再現され、自動音声ガイドにより解説が行われている。また、柏原藩に關係する歴史遺産として、陣屋町であった場所に前期柏原藩の3代藩主織田信勝を祀る織田神社、織田信長を祀る建勲神社、江戸時代に建てられた太鼓櫓などが現存している。その他には、陣屋跡付近に藩主の織田氏に關する歴史と民俗資料が展示されている丹波市柏原歴史民俗資料館、2014年に柏原ライオンズクラブより寄贈された前期柏原藩初代藩主で織田信長の弟である織田信包の座像

などがあり、陣屋町であったエリアには、織田氏の家紋である織田木瓜の紋が描かれた行灯や織田木瓜と城下町かいばちと書かれた行灯(第3図)が街灯に併設されている。

柏原歴史の会会長で柏原藩陣屋跡整備委員会委員のA氏によれば、柏原藩主が開校した藩校崇廣館から多くの偉人を生み出したこと。崇廣館を引き継いだ崇広小学校を中心に柏原が、教育の町であることは地域に浸透している。また、陣屋跡に關するイベントの実行委員長や観光案内所職員への聞き取りによれば、こうした点が陣屋跡や歴史に關する取り組みを行なう際に、様々な取り組みに対する理解が得やすいことに繋がっているとのことであった。

陣屋跡付近には、丹波市出身の偉人に關する展示施設や歌碑、句碑などといった教育の町としての熱量を感じられる構造物が複数存在する。このうち、明治時代に小学校校舎として建てられた歴史的建造物であるたんば黎明館のパンフレットでは、教育に力を入れてきた地域の歴史が詳しく示されて、教育の町としての歴史を発信しており、その力の入れ方が伺える。

丹波市教育委員会(2008:96)によれば、2006年5月に崇広小学校を対象とした檜皮葺工事の見学会が実施された。藩校崇廣館を再建する会のチラシでは、2024年に市内の小学校3校の児童に向けて、崇廣館に關する歴史講座が開催された。また、同年には、柏原八幡宮や藩主の菩提寺である成徳寺、そして個人所蔵が所蔵する貴重な書画や彫刻を数多く展示した「崇廣館にまつわる展示会」と呼ばれるイベントが開催され、ボランティアとして柏原中学校の生徒7名が参加し、後日には、生徒が崇廣館や氷上郡の教育に關わる研究発表をした。このように藩校を中心とした柏原藩の歴史継承に關する地域学習が、柏原町において実践されている。

第 4 表 織田まつりとうまいもんフェスタに関する年表

西暦(和暦)	出来事
1880(明治 13)年	織田信長を祭る建勲神社の社が建設。6 月 2 日、3 日に織田家の宝物展と武者行列実施
1927(昭和 2)年	武者行列に少年武者が加わった
1933(昭和 8)年	鳳輦が奉納され古典的な祭礼として実施
1978(昭和 53)年	武具の痛みにより長らく中止されていた武者行列が復活
1986(昭和 61)年	織田信長サミットの第 2 回会場で柏原町が選ばれた(武者行列とは無関係)
1988(昭和 63)年	武者行列に食のパザールコーナーが加わり多彩化、織田まつりとして町の一大まつりとなった
1996(平成 8)年	第 12 回の織田信長サミット開催場所として再び選ばれ、織田まつりと併せて 10 月に実施
1997(平成 9)年～	柏原うまいもんフェスタを併せて、織田まつりとうまいもんフェスタとして行われた

資料：丹波かいばら織田祭りホームページ、柏原町誌編集委員会（1999：192）

(2) 織田まつりとうまいもんフェスタ

柏原藩陣屋跡に関わるイベントとして、毎年 10 月に織田まつりとうまいもんフェスタと呼ばれるイベントが実施されている。第 4 表にも示したとおり、その中のメインイベントである武者行列は、1880（明治 13）年から実施されて、もともとは建勲神社の例祭として行われていたが、1988 年以降、様々なイベントと併せて実施されてきた。こうしたイベントのうち 1986 年と 1996 年に実施された織田信長サミットは、1985 年から信長ゆかりの地である滋賀県安土町の提唱で、織田信長の歴史に関係する 20 市町村が交流を深め、歴史と文化を土台にした魅力ある街づくりを進めるために始められた（柏原町誌編集委員会 1999：192）。現在では、丹波市に織田信長公、織田信包公ゆかりの町があることを市外へ PR し、観光振興につなげることをイベントの目的として行われている（織田まつりとうまいもんフェスタ 2024 年度の事業完了報告書による）。

丹波かいばら織田祭りホームページによると、武者行列は、柏原藩主織田氏の子孫、浅井三姉妹の長女の茶々役、次女の初役、三女

の江役のほか、花形でもある毛槍や挟み箱の役、子供武者、大人武者、足軽、雑兵の役などで構成されていた。また、地域住民以外の一般参加者も参加費 1000 円、鎧武者の山人の場合は 3000 円となっていて計 50 名が広く募集されていた。

2025 年の織田まつりとうまいもんフェスタは 10 月 19 日に開催された。本フェスタのチラシによると、柏原藩陣屋跡を出発点、建勲神社を終着点として、町を練り歩く武者行列（第 4 図）のほかに、メイン会場である柏原自治会館駐車場では、特産物や銘菓を販売する飲食ブースが設けられ、メイン会場と陣屋跡両方で太鼓演奏が行われた。また、柏原藩陣屋跡や崇廣館にまつわる展示会、丹波黒豆収穫体験などが実施されていた。そしてチラシには記されていないが、フェスタ当日は、柏原藩陣屋跡の表御殿が無料公開されていた。

このように鎧や袴などを身につけ子供や大人まで誰もが体験できる武者行列だけでなく、武者行列の出発地点を陣屋跡としていた点や表御殿の入場料無料にしていた点など、地域住民だけでなく観光客にとっても陣屋跡などの柏原の歴史について知ってもらえるきっかけを作っていた。また、飲食ブースや丹波黒豆収穫体験、太鼓演技など、歴史に興味がない人でも来訪したいと思えるような取り組みや、崇廣館にまつわる展示会といった柏原藩の歴史遺産について深く知ることができる取り組みも行われていた。このイベントの開催内容は地元住民の歴史継承を促すきっかけになりえる。こ

のイベントは、柏原藩と柏原藩陣屋跡の歴史継承に大きな役割を果たしていると言えよう。



第 4 図 武者行列

2025 年 10 月 19 日林撮影

(3) 柏原藩陣屋跡の歴史継承について

織田まつりとうまいもんフェスタ実行委員長で、30年前から数年前まで武者行列に参加していた丹波市柏原町出身のB氏によれば、住民の理解、古くから教育の町としての地域学習、長年信頼関係を築いてきたことにより、織田まつりとうまいもんフェスタが毎年開催できている。丹波市観光協会かいばら観光案内所室長で同市春日町出身のC氏も同様のことを述べていた。

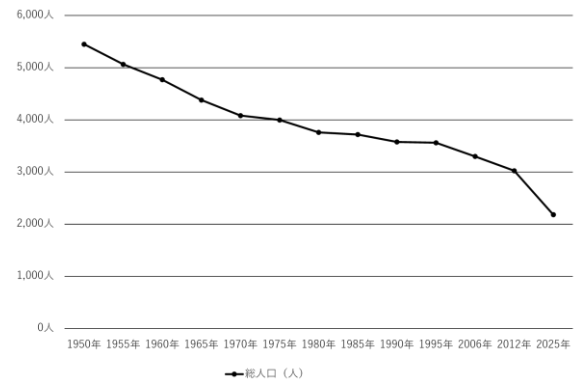
以上のように柏原藩陣屋跡や柏原藩に関わる遺構が良好であり、地域として陣屋跡を含む観光振興が熱心で、活気があり、陣屋を中心に藩の歴史が継承されているように感じられた。また、丹波市柏原町では、柏原藩の歴史に関連させて、観光客が繰り返し訪れるようにする仕掛けができており、盛り上がっていた。

Ⅲ. 三日月藩乃井野陣屋跡の復元・復原



第5図 三日月藩乃井野陣屋跡と周辺

出所：国土地理院地理院タイルに加筆して作成した。



第6図 三日月地域(旧三日月町)における総人口の推移

資料：三日月町（1996：4）、三日月地域づくり協議会（2012：11）、佐用町総務課（2006、2015、2025）

1) 三日月地域の概要

兵庫県南西部の山間部に位置する佐用町は、2005(平成17)年10月1日における佐用町、上月町、南光町、三日月町の4町合併より成立した。三日月藩乃井野陣屋跡は、三日月地域(旧三日月町)に位置する(第5図)。三日月藩乃井野陣屋跡は、姫新線三日月駅から比較的に近いが、三日月駅に停車する姫新線の列車は各駅停車に限られている上に、日中は3時間に2本程度の運行であり、鉄道によるアクセスは決してよいとは言えない。佐用地域(旧佐用町)には、天空の城とも呼ばれる利神城跡とその麓の宿場町平福がある。上月地域(旧上月町)には、戦国時代に織田氏と毛利氏が激戦を繰り広げた上月城跡が存在する。いずれも全国区で知られた有名な城跡であり、特に利神城跡は国指定史跡に登録されている。また、この2城跡は、佐用町により様々な歴史継承の取り組みが行われており、情報発信量も多く、地域の誇りになっているといえる。

佐用町総務課の資料によると、2025年6月末の三日月地域における総人口は2,183人であり、2006年6月末総人口の3,299人から3割減少しており、過疎化が進んでいる(第6図)。三日月地域づくり協議会(2012:4,9,22)によると、主要産業に農林業、特産品に三日月みそ、三日月高原ぶどう、三日月そばなど



第 7 図 三日月藩乃井野陣屋館

2025 年 12 月 14 日林撮影

がある。また、姫路市から約 40km、姫新線で 55 分であり、姫路市やたつの市へ通勤する人々の住宅地としての役割が大きい。

2) 三日月藩乃井野陣屋跡と関連遺跡の概要

三日月藩乃井野陣屋跡には、三日月陣屋、乃井野陣屋、三日月藩陣屋、乃井野藩陣屋等の呼び方が存在するが、佐用郡教育委員会編（2004）、西嶋建築設計事務所編（2005）の報告書の史跡名称が、三日月藩乃井野陣屋跡のため、藩庁として利用されていた時代は三日

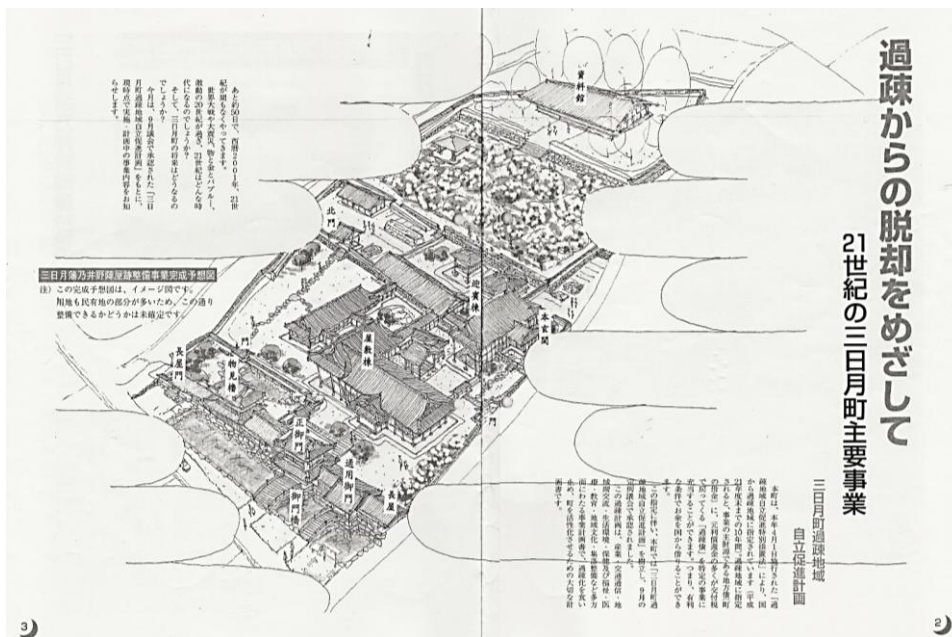
月藩乃井野陣屋、現在の陣屋跡の名称は三日月藩乃井野陣屋跡とする。西嶋建築設計事務所編 2005：1-7)によると、三日月藩乃井野陣屋跡は、織田信長に仕えた森長可と森蘭丸の弟である森忠政の子孫、森長俊により建てられ 1700（元禄 10）年に完成した。その後、廃藩置県を迎えると、陣屋の建物は取り壊されて移築され、堀は埋め立てられた。陣屋跡地は私有地となり田畑となった。佐用郡教育委員会編（2004：26-35）、西嶋建築設計事務所編（2005：17-18）によると、1982（昭和 57）年になると旧三日月藩主を含む、地域住民が中心となり三日月陣屋跡整備推進委員会が結成され、1996 年に「城跡（陣屋）等歴史的町並保存整備構想調査報告書」が作成され、1999 年から 2004 年にかけて、堀・石垣・物見櫓の復元と橋・長屋・門の復元工事がおこなわれた。西嶋建築設計事務所編（2005）のはじめによると、同年 4 月に三日月地域の歴史資料館として三日月藩乃井野陣屋館が開館した（第 7 図、第 5 表）。

1996 年に策定された三日月町振興計画では、教育・歴史・文化ゾーンとよばれる町による土地利用構想の一環として、三日月城（陣屋）の復元が構想され、郷土愛を醸成させることが謳われた。目的は、観光振興、地域のシンボル、文化の継承と発展であった。2000 年 11 月の「広報みかづき」は、完成予想図（第 8 図）が掲載された。そこには、「過疎脱却」と記されていて、過疎化対策の一環に位置付けられている。この図にある、物見櫓と石垣、堀が復元、橋（中御門橋、通用御門橋）、門（長屋門、中御門、通用御門）、長屋が実際に復元された。また 2017 年には、陣屋町に位置する表門が復元された。しかし、これら以外の資料館の建設や屋敷棟の復元・復原は実現していない。

第 5 表 三日月藩乃井野陣屋跡に関わる主な出来事

西暦(和暦)	三日月藩乃井野陣屋跡に関わる主な出来事
1697（元禄 10）年	森長俊が津山新田藩から移封、三日月藩（1 万 5 千石）立藩
1700（元禄 12）年	三日月藩乃井野陣屋、陣屋町が完成
1843（天保 14）年	陣屋の中御門・長屋が大破し、再建に着手
1871（明治 4）年	廃藩置県、陣屋の石垣や堀は 1 部を残し埋められ、建物は入札物件として建物が売り払われ、跡地は田畑となった
1982（昭和 57）年	三日月陣屋跡整備推進委員会が結成された
1982（昭和 57）～2003（平成 15）年	調査研究・保存整備計画に関する会議が 33 回実施
1991（平成 2）年	陣屋跡が町指定有形文化財に登録
1996（平成 8）年	三日月町振興計画が策定 「城跡（陣屋）等歴史的町並保存整備構想調査報告書」作成
1996（平成 8）～2003（平成 15）年	史跡指定範囲内での発掘調査が行われた
1999（平成 11）年～2004（平成 16）年	堀・石垣・物見櫓が復元、長屋・橋（中御門橋、通用御門橋）・門（長屋門・年中御門・通用御門）が復元された
2005（平成 17）年 4 月	三日月の歴史資料館として三日月藩乃井野陣屋館が開館
2017（平成 29）年	表門が復元された

資料：佐用郡教育委員会編（2004：26-35）、西嶋建築設計事務所編（2005：はじめに、1-7, 17-18）、佐用町教育委員会事務局（2018）



第 8 図 三日月藩乃井野陣屋跡整備事業完成予想図

資料：「広報みかづき」322（2000 年 11 月：2-3）

2024 年 12 月 14 日と 2025 年 11 月 9 日の現地調査によれば、陣屋館の開館日は土日祝日のみで、入館料は無料である。陣屋館は佐用町教育委員会が所有しているが、



第 9 図 倒壊した武家屋敷の門
2025 年 11 月 9 日 林撮影



第 10 図 日限地藏尊夏大祭
花火大会当日の田此集落
2025 年 8 月 23 日 林撮影

開館日の受付・管理は佐用町シルバーセンターから派遣された 3 人が交代で担当している。また、復元・復原された陣屋館内部は、三日月地域の歴史（古代～現代）と三日月藩乃井野陣屋の復元整備に關す

るパネル展示、陣屋で用いられていた瓦などが展示されている。佐用町教育委員会の陣屋館担当者 D 氏によれば、年間の来訪者は 1,000 人から 1,500 人程度であり、観光地として発展しているとは言い難い。

三日月藩に関わる遺構が三日月地域に存在している（第 5 図）。藩主森氏の先祖である 3 霊を祀る列

祖神社と藩主の庭園、藩主森氏により藩校廣業館として開校し、廃藩置県後に引き継ぐ形で地域の学校として建てられた旧広業館の建物、かつて三日月藩士が住んでいた 6 軒の武家屋敷、三日月藩士の演武場として整備された三方里山山上の調練場跡に残る石垣遺構、三日月藩士が江戸から持ち帰ったとされる田此の日限地藏尊などが現存している。その他には、三日月藩の町人地としても機能した旧因幡街道の宿場町であり、織田信包の末裔が本陣を構えた三日月宿が存在した。このうち、6 軒の武家屋敷が残されているが、老朽化が激しいものも存在し、特に 1 軒は、老朽化により 2025 年 10 月に門が倒壊した（第 9 図）。なお、日限地藏尊では、毎年 8 月に日限地藏尊夏大祭と呼ばれる、屋台や打ち上げ花火など催しが行われている（第 10 図）。

3) 三日月藩乃井野陣屋跡の復元・復原の位置づけと評価

2) で述べた通り、2005 年に三日月藩乃井野陣屋跡の石垣・長屋・門・橋の復元・復原が完了し、三日月藩乃井野陣屋館が開館した。復元・復原された陣屋跡はどのように評価さ

れているのだろうか。

三日月町城跡（陣屋）保存整備委員会専門委員長八木哲浩氏は復元工事について、「ひたすら、江戸時代の姿をよみがえらせる努力が続けられてきた」と評価し、「全国的にも類例のない三日月陣屋の復元工事」と記している。全国でも希少な陣屋跡の復元と考えていることがわかる。

城郭研究者の中井編（2010：243）は、名城ランキング本においてパーツ別ランキングとして、「陣屋ベスト 10」を設けその 9 位に三日月藩乃井野陣屋跡（三日月陣屋跡）を挙げた。また中井編著（2021：10）では、陣屋の定義で三日月藩乃井野陣屋跡の復元・復原された櫓や門などを写真付きで紹介している。また、山上（2020：13）は、播磨国内の幕府代官（郡代）陣屋、旗本陣屋、交代寄合陣屋、大名（藩）陣屋、飛地領陣屋を含めた陣屋跡のうち、見学に最も適している陣屋は、三日月陣屋（三日月藩乃井野陣屋跡）としている。

三日月町長は、三日月藩乃井野陣屋と陣屋町などの整備基本構想である佐用郡教育委員会編（2004）の挨拶において、基本構想の推進について「歴史的町並み文化的遺産の共生をはかることが町民の未来にわたり誇りにできることであり、三日月町ならではの心のやすらぎを与えるものである」と述べ、陣屋跡の復元・復原が地域の誇りになることを期待していた。

一方、旧三日月藩士の子孫である G 氏は、陣屋跡の復元・復原工事が行われた当時、何故わざわざ陣屋を復元・復原するのかに疑問を持っていたと述べていた。三日月地域の住民であり、陣屋館スタッフである H 氏は、「陣屋の復元・復原に関しては、三日月町（三日月地域）住民全員にとって有難いものだったのかと言えば何とも言えない。旧三日月藩の子孫の方々にとっては、有難いことだったかもしれない」と述べていた。

合併後の佐用町ではどうなのだろうか。「広

報さよう」147（2017 年 12 月：10-11）では、「佐用の歴史と文化を磨く未来伝承プロジェクト（概要）」さようプライドにおける 4 つのプロジェクトのうちの 1 つに、歴史遺産を磨く、町全体の歴史文化遺産の活用がある。このプロジェクトは、町内に点在する歴史遺産に目を向け、それらのつながりを線で結び、全域で面として高めることを目的とし、このプロジェクトに高倉山城跡、上月城跡と共に、三日月藩陣屋跡と表門（三日月藩乃井野陣屋跡）が含まれている。

2022 年に策定された、『佐用町第 2 次総合計画後期基本計画』（2022：12, 22）では、観光の振興のうち、名所・旧跡に利神城と平福の街並み、上月城、三日月藩乃井野陣屋の 3 か所が挙げられ、貴重な歴史資源をまちの魅力づくりや地域への愛着意識の醸成に生かすことを目的に、広域観光ルートや SNS を利用した PR と歴史遺産の積極的な保護・活用に努めることを課題としている。

しかし、三日月地域づくり協議会の関係者数名への聞き取り調査によれば、三日月藩乃井野陣屋跡を含む三日月地域の歴史継承に対する熱意があまり感じられないとしている。

以上から、旧三日月町や佐用町の行政は、三日月藩乃井野陣屋跡が地域住民にとっての誇りや地域への愛着意識に繋がることを一貫して期待している、また専門家からは全国でも希少な陣屋跡の復元として評価をしている。しかし、三日月地域づくり協議会や地域住民への聞き取り調査からそれらの想いや評価は地域住民に伝わっておらず、地域の誇りになっているとは言い難い状況である。

IV. 三日月地域づくり協議会による歴史継承に関わる取り組み

（1）三日月地域づくり協議会の概要

佐用町ホームページ「三日月地域づくり協議会」によると、三日月地域の住民が中心となり 2006 年 6 月に三日月地域づくり協議会

が設立された。2023 年 12 月のサイト更新時点で、9 つの専門部会と 3 つの地域部会の 59 人の運営委員により構成されている。三日月地域づくり協議会の関係者への聞き取り調査によると、三日月町が合併して佐用町が成立したことに伴い、三日月地域の住民により結成された協議会であり、「三日月の誇り」プロジェクト部会と歴史保存会の 2 つの専門部会が、三日月藩乃井野陣屋跡を含めた三日月の歴史に関する多くの取り組みを行っている。

(2) 小学生、中学生を対象とした地域学習

協議会として、三日月小学校の児童や三日月中学校の生徒に向けては、地域学習・歴史探訪を行っている。「三日月の誇り」プロジェクト部会員で地域学習・歴史探訪の講師を務める E 氏によると、取り組みは、2 日ばかりで実施され、1 日目に三日月地域の歴史について学び、2 日目に三日月地域内の歴史遺産を巡るという形式である。一部の児童・生徒には、学校で学ぶような日本全体の歴史ではなく、三日月地域の歴史について深く知ることができて興味深いと好評であるという。

(3) みんなの三日月さんぽの出版

E 氏によると、2017 年に『子どもたちの三方山さんぽ』、2020 年に『みんなの三日月さんぽ』、2022 年に『さよ郡さんぽ』を自費出版しており、佐用町内の各小学校、中学校、佐用町立図書館に置かれている。この 3 冊は、A4 判で 250～300 ページほどあり、三日月地域に関係する植物、歴史遺産、名所、古典文学などを多くの人々に知ってもらうために出版され、子どもから大人まで楽しめるようにカラー版で印刷されている。このうち、『みんなの三日月さんぽ』は、2020 年のコロナ禍により、後述する武家屋敷マルシェが中止されたことをきっかけとして執筆された。掲載内容は、三日月の名所、歴史遺産、植物に関する説明に加え、三日月地域の名所や歴史に関

するクイズ「三日月検定 99 問」や植物に関するクイズ「植物の別名クイズ」もある。

三日月地域づくり協議会により、2020 年に三日月地域づくりのホームページ「三日月さんぽ」が開設され、地域のイベントや歴史遺産に関する情報が発信されている。2021 年には三日月駅と武家屋敷群の前など 5 か所に三日月地域の名所や歴史遺産を示す観光案内看板「三日月さんぽ」が設置された。2022 年には、三日月地域の歴史遺産、三日月地域の飲食店や直売店の場所を記したパンフレット「三日月さんぽ」が発行されたが、その後は発行されていない。

(4) みかづき武家屋敷マルシェの開催

三日月地域では、三日月藩や乃井野陣屋に関わるイベントとして、三日月地域づくり協議会によって、2016 年からみかづき武家屋敷マルシェが行われている。イベントの目的は、老朽化する武家屋敷の保存を目的に多くの人に武家屋敷の現状を知ってもらい歴史遺産の機運を高めることをねらっており、そのことは、初回からのすべてのイベントチラシに記されている。本イベントの発案者は、兵庫県内の古民家再生に携わる NPO 法人町なみ屋なみ研究所理事長の酒井宏一氏であった。

2016（第 1 回）～2025 年（第 8 回）までのイベントチラシによると、ステージ、マルシェ、ウォークの 3 つを軸とした形式で行われていて、ステージでは、オーケストラ、太鼓、ジャズ、合唱などの演奏や大筆のパフォーマンス、ダンスなどの演技が行われている。マルシェでは、手芸小物の販売ブースや様々な料理が味わえる飲食ブースなどがある。ウォークに関しては、武家屋敷群や表門を巡るガイドツアー、三日月藩の古文書に関する記念講演が行われている。

会場は、2016 年（第 1 回）は武家屋敷周辺、2017 年（第 2 回）～2019 年（第 4 回）は列祖神社と陣屋館、2022 年（第 5 回）は味わいの

里三日月、2023 年（第 6 回）と 2024 年（第 7 回）は陣屋館であった。このうち、2017 年と 2018 年には甲冑づくり体験、2018 年と 2019



第 11 図「「三日月の誇り」ガイドマップ」
E 氏提供

年には「三日月の誇り」プロジェクトとして E 氏が制作した「「三日月の誇り」ガイドマップ」（第 11 図）の配布を実施した。2019 年には、神戸女子大学大学院生による古文書の解説、2023 年には、和テイストのコスプレ来



第 12 図 マルシェの飲食
スペース

2025 年 11 月 9 日 林撮影

場者へのおもちゃプレゼントと表門・武家屋敷スタンプラリーが行われており、広く歴史に興味を持ってもらえるような取り組みが含まれていた。

第 8 回目の 2025 年武家屋敷マルシェは 11 月 9 日に実施された。チラシによると、「2025 みかづき地域武家屋敷マルシェ」と題して、メイン会場は三日月地域交流センターでステージとマルシェが行われた。ステージは、三日月アンサンブル、兵庫県立大学 JAZZ 研究会等の 8 組の演技、演奏が行われたほか、様々な景品が当たる大じゃんけん大会が 2024 年に引き続き行われた。マルシェでは、手芸小

物の販売ブースや飲食ブースが置かれ、計 16 店出店していた（第 12 図）。また、三日月藩主森家の家紋である鶴丸が描かれ武家屋敷マルシェという文字が印字された缶バッジが本部で販売されていた。その他には、子ども向けの取り組みとして、射的、輪投げ、わたがしプレゼントなどが行われた。

当日が雨天だったこともあり、武家屋敷周辺を通るガイドツアー（武家屋敷ウォーク）は中止となったが、専門家による三日月藩の古文書に関する記念講演会（第 13 図）が実施された。また、ステージやマルシェも、本来であれば三日月地域づくりセンターの駐車場で行われる予定であったが、ステージは交流センター 2 階のホールで行われ、マルシェは交流センター 1 階のスペースと駐車場でそれぞれ行われた。

ステージ開幕式が三日月保育園児による演技ということもあり、老若男女様々な人が参加していた。ステージでは、上方に本イベント名と鶴丸と三日月を合体したマークが記された横一文字の横断幕が掲げられた。ステージの開幕式では、司会者が「歴史あるイベントである武家屋敷マルシェ」と述べていた。三日月藩の古文書に関する講演会の参加者は、男性の高齢者が中心であった。

館内は活気があったように感じられたが、雨天によって館内の開催になったことや、武家屋敷ウォークが中止となったことにより、中心会場に来場者が集中したことによって考えられる。

ステージやマルシェの催しやブースでは、過去に行われた甲冑づくり体験や、表門・武家屋敷スタンプラリーなどの幅広い人へ歴史の興味を持ってもらえるような催しは見られなかった。一方で、記念講演会は、専門的な内容であり三日月藩に関わる前提知識がないと楽しめないイベントであると感じられた。なお、佐用町外から来たステージ出演者の F 氏に聞き取り調査を行ったところ、武家屋敷

とは何かさっぱりわからなかったと話した上で、イベントの目的を果たすためには、マルシェやステージ目的の来訪者に対して、三日月藩乃井野陣屋や武家屋敷などの歴史が伝わるような取り組みをした方が良いと述べていた。

以上から、このイベントはステージやマルシェ目的の来場者と武家屋敷ウォーク、古文



第13図 三日月藩古文書講演会

E氏提供（2025年11月9日撮影）

書講演会目的の来場者に分かれていることから、本来の目的である武家屋敷群の町並みを後世に残すために歴史遺産の現状を認知してもらい機運を高めるという目的を達成することに向かっているとは考えにくい。三日月藩乃井野陣屋跡や武家屋敷といった三日月地域の歴史遺産を次世代に継承する取り組みとして継続させていくには、改善の余地があると言わざるをえない。

V. おわりに

本研究では、復元・復原され、歴史資料館として開館した三日月藩乃井野陣屋跡を対象とし、陣屋跡の復元・復原の経緯や背景を踏まえた上で、歴史継承の現状を明らかにすることにより、他の陣屋跡と比較して、三日月藩乃井野陣屋跡の整備がどのような意味があるのか、地域の誇りになっているのかについて検討することを目的とした。

Ⅱでは、文化財保護法改正による文化財の保存・活用の変化について確認した。改正により、文化庁が、文化財の保存・活用に取り組むためには、地域住民による継承活動が必要と指摘していた。次に志波城跡の復元が地

域に与えた影響について明らかにした。そして大名が拠点とした大名藩陣屋である7か所の陣屋跡の保存・活用の現状から、各陣屋跡が地域の誇りになっているのか把握した。

平安時代の城跡である志波城跡の保存・活用に関わる先行研究によれば、復元された当初は、史跡の価値と復元等の整備の意義が伝わっていなかった。しかし、展示案内施設や城跡に関係するイベントといったソフトな取り組みを増やしたことにより、地域外からの来訪者も増え、志波城跡の草刈りなど維持管理や催事に関わる地域住民が価値ある場所だと認識するようになった。また、来場者の満足している様子から次第に愛着や誇りを感じるようになり、住民の自主的な意識や行動に繋がっていた。

城主格や無城の大名が拠点とした陣屋跡のうち、取り上げた7か所の陣屋跡が地域の誇りとして歴史継承されているのかについて確認したところ、歴史継承が行われていない陣屋跡と歴史継承が行われている陣屋跡が存在した。柏原藩陣屋跡では、藩校に関わる地域学習の実施、大人から子どもまでの有無に関わらず申し込みにより参加できる市民参加型の武者行列など、陣屋跡を含むありとあらゆる取り組みが行われ、地域として観光振興が熱心であり、7か所の陣屋跡のうち最も歴史継承が行われていた。この背景には、藩校の教えが小学校教育を通して町に浸透している点、1880（明治13）年に始まった武者行列が続けられている点など、地域住民が藩の歴史や陣屋跡を含めた町の歴史遺産に対して誇りとして認識し、現代へと引き継がれていた。

Ⅲで取り上げた、2005年に行われた三日月藩乃井野陣屋跡の復元・復原が果して地域の誇りとして歴史継承されているのか、整備報告書、広報誌などの文献調査、聞き取りなどの現地調査から明らかにした。その結果、三日月藩乃井野陣屋跡の復元・復原は旧三日月藩士の子孫を含む委員会が主体となり行われ、

復元・復原は町の一大プロジェクトであり、町長も町の誇りになることを期待していた。専門家は陣屋跡の復元・復原を評価していた。しかし、地域住民の聞き取り調査などから、それらの想いや評価は地域住民に伝わっておらず、地域の誇りになっているとは言い難い状況であった。

IVでは、平成合併により成立した佐用町で、地域住民により結成された三日月地域づくり協議会のメンバーによって、地域の歴史遺産・名所の案内看板の設置、小学校児童や中学校生徒に向けた地域学習などの歴史継承に関わる様々な取り組みが行われてきたが、多くの地域住民はそれらの歴史継承に対して興味を示しているとは言えない状況であった。

三日月地域づくり協議会により、老朽化する武家屋敷の現状を知ってもらうことを目的に開催されてきた武家屋敷マルシェでは、武家屋敷の現状について知ることができるのは、歴史に関する知識が備わっている人が楽しめる専門的なイベントに限られていた。ステージやマルシェなどの歴史に関係しないイベント目的の来場者に、武家屋敷の現状や三日月藩、陣屋を知ってもらえるような取り組みはほとんど行われていなかった。

以上のように三日月地域づくり協議会によって、三日月藩と乃井野陣屋跡の歴史継承に向けた取り組みが行われてきているものの、多くの地域住民が興味を示しているとは言えない状況であったと言える。現状のままで、三日月藩乃井野陣屋跡や武家屋敷などの歴史遺産を、今後地域住民の誇りにつなげていくことは容易ではなからう。

初めに述べたように、大名(藩)陣屋跡の多くは、小規模であるがゆえに住民の興味・関心が向かないため、自治体も整備しづらく、失われたものも多い。しかし、柏原では様々な人が参加できるようにしていた武者行列を含め、地域としてあらゆる取り組みを継承してきたことが、誇りになってきている可能性

がある。

このように地域住民にとって地域の歴史が誇りになるということを認識するために何らかの仕掛けが必要である。

今野・倉原(2023)は、史跡の復元に観光地としての持続可能性がない場合は、地域住民に対する活用を志向することにより、地域住民に愛着と誇りが生じる可能性を指摘していた。三日月藩乃井野陣屋跡が専門家から高い評価を受けている上に、佐用町によって上月城跡や利神城跡、平福に並ぶ評価を受けているにも関わらず、三日月地域、そして佐用町民の誇りになっていないことは非常にもったいないことだと考える。

そこで、柏原藩陣屋や藩の歴史が地域の誇りとなり、歴史継承されていたことを参考にして、三日月藩乃井野陣屋跡が地域の誇りとして歴史継承されることを目標に、武家屋敷マルシェ、ウォークといった既存の取り組みを活かし、三日月の歴史についてあまり興味関心がないマルシェ、ステージ目的の来場者に三日月地域の魅力を伝える催しを行い、歴史に触れるきっかけになりそうな2つの取り組みを提案したい。

1つ目は、マルシェ開会式ではほとんど武家屋敷についてほとんど触れていないことから、マルシェがどのような目的で行われているか、武家屋敷とは何か、武家屋敷の現状はどのようになっているか、歴史遺産をどのように高めたいかについて、写真付きのスライドショーを用いて2分程度の解説を行ってはどうだろうか。

2つ目は、2020年に出版された『みんなの三日月さんぽ』の「三日月検定」を活かし、三日月の歴史遺産を含む名所や植物まで三日月にまつわる幅広いものを知ることができる取り組みとすることである。2023年に行われた表門・武家屋敷スタンプラリーを復活させ、三日月検定をクイズの問題にした、「三日月さんぽクイズ」(仮称)といったイベントを

行ってはどうかだろうか。

三日月さんぽクイズ（仮称）では、陣屋館や武家屋敷付近などに問題を設置することで、武家屋敷の現状を肌で感じるきっかけを作ることができる。また、三日月地域づくり協議会の方々による解説を行うことにより、三日月地域について知るきっかけができ、実施するにあたっては、このような取り組みに慣れている経験者や地域に関わりたいたいと思っている若者にボランティアとして参加を呼び掛けることで、より地域一体となったイベントになるようにしていくことが必要である。

三日月地域は、今後歴史継承が行われなくなり魅力が消えていくか、魅力が再発見されて、平福や上月のように地域の誇りとして歴史継承がなされるかどうかの瀬戸際であると筆者は考えている。とはいえ、現状の方法を少し変えることで状況が変化する可能性もあり、柏原藩陣屋にも劣らない様々な可能性を秘めている地域である。これからの取り組みがうまく行われれば、歴史の継承だけではなく、来訪者にとっても、陣屋跡を含む三日月地域の歴史が忘れ去られることもなくなるのが期待される。そして、現在よりも活気づいた地域になるのではないかと考えている。

三日月藩乃井野陣屋や柏原藩陣屋が位置した、旧三日月町と旧柏原町は、平成大合併の波に洗われた。特に三日月藩乃井野陣屋館の開館は、平成大合併の直前であった。これらの陣屋藩の歴史継承は、何らかの影響を受けたと考えられる。自治体の領域が広がったことがどのような影響をもたらしたのかについては、本研究の課題として記しておきたい。

付記・謝辞

本稿は、林 優斗が、2025 年 12 月に神戸学院大学人文学部に提出した卒業研究を大幅に加筆修正したものである。

研究では、柏原歴史の会会長の A 氏、織田まつりとうまいもんフェスタ実行委員の B 氏、

丹波市観光協会かいばら観光案内所室長の C 氏、佐用町教育委員会教育課の D 氏、三日月地域づくり協議会部会員の E 氏、武家屋敷マルシェのステージ出演者の F 氏、喫茶であい来訪者 G 氏、三日月藩乃井野陣屋館スタッフの H 氏にご協力をいただきました。また、奈良大学文学部土平博教授にご助言をいただきました。心より御礼申し上げます。

文献

- 青木和夫ほか編（1993）『日本史大事典』第 4 卷、平凡社
- 宇高雄志（2022）：「旧三日月藩陣屋町と武家屋敷群（兵庫県佐用町）―陣屋町と武家屋敷の特徴―」民俗建築 161、pp. 42-52
- 柏原町誌編纂委員会（1999）：『柏原町誌 第三卷』柏原町
- 今野公顕・倉原宗孝（2023）：「地域や住民の関与の面から見た史跡の保存整備活用に関する考察」日本建築学会技術報告集 29-72、pp. 1047-1052
- 佐用郡教育委員会編（2004）：『三日月町指定文化財 三日月藩乃井野陣屋跡附陣屋町等歴史的町並 整備基本構想』三日月町
- 佐用町（2022）：「佐用町第 2 次総合計画後期基本計画（令和 4～8 年度）」
- 三田市史編さん専門委員会（2000）：『三田市史第 3 卷』三田市
- 塚崎博行（2022）：『みんなの三日月さんぽ』（私家版）
- 丹波市教育委員会（2008）：『国指定史跡 柏原藩陣屋跡 整備事業報告書』丹波市
- 土平博（2009）：「近世陣屋と町の形態に関する再検討 陸奥国南部を事例として」奈良大学紀要 37、pp. 65-82
- 中井均編（2010）：『日本の名城 都道府県別ベスト 10』新人物文庫
- 中井均編著（2021）：『近江 旅の本 近江の陣屋を訪ねて』サンライズ出版

中島義一（1962）：「一万石大名の城下町(第1報)」新地理 10-2、pp. 1-15

中村剛彰（2020）：「特集はりまの陣屋 播磨の陣屋と陣屋町に迫る 九代にわたる森家と、陣屋の復原」BanCul 114, 2020 年冬号、pp. 16-19

西嶋建築設計事務所編（2005）：『三日月町指定文化財史跡 三日月藩乃井野陣屋跡 橋・門・長屋等復元整備報告書』三日月町文化庁（2018）：「文化財審議会文化財分科会企画調査会(第1回)議事次第」「資料3 文化財保護法改正の概要について」

文化庁（2020）：「史跡等における歴史的建造物の復元等に関する基準」

三日月地域づくり協議会（2012）：「三日月まちづくりブック」

三日月町（1996）：『三日月町振興計画』

山上雅弘（2020）：「播磨の陣屋と大名・旗本」BanCul 114、2020 年冬号、pp. 9-14

「広報さよう」147、2017 年 12 月

「広報みかづき」191、1989 年 12 月

「広報みかづき」322、2000 年 11 月

織田まつり・うまいもんフェスタ実行委員会（2025）：「柏原藩織田まつりとうまいもんフェスタ 2025 年 10 月 19 日」（チラシ）

佐用町教育委員会事務局（2018）：「三日月藩乃井野陣屋表門」（パンフレット）

崇廣館を再建する会「藩校「崇廣館」の再建をめざして」（チラシ）

三日月地域づくり協議会「みかづき武家屋敷 マルシェ・ウォーク」(チラシ)(2016、2017、2018、2019、2022、2023、2024、2025)

佐用町ホームページ「三日月地域づくり協議会」 <https://www.town.sayo.lg.jp/cms-sypher/www/service/detail.jsp?id=1019>（最終閲覧 2025 年 3 月 8 日）

玉縄城址まちづくり会議ホームページ「玉縄城を守る、玉縄城址まちづくり会議」
<https://tamanawajo.jp>（最終閲覧 2025 年 3 月 8 日）

丹波かいばら織田まつりホームページ
<https://odamatsuri.weebly.com/>（最終閲覧 2025 年 3 月 8 日）

丹波市ホームページ「柏原藩陣屋跡」
<https://www.city.tamba.lg.jp/soshiki/shakaikyoikubunkazaika/gyomuannai/7/1/2441.html>（最終閲覧 2025 年 3 月 8 日）

丹波市ホームページ「丹波市立柏原歴史民俗資料館・田ステ女記念館」
<https://www.city.tamba.lg.jp/soshiki/shakaikyoikubunkazaika/gyomuannai/5/4/2061.html>（最終閲覧 2025 年 3 月 8 日）

三日月地域づくり協議会ホームページ「三日月さんぽ—三日月地域づくり協議会—」
<https://mikazuki0790.wixsite.com/mikazuki>（最終閲覧 2025 年 3 月 8 日）

（はやし ゆうと・神戸学院大学人文学部 4 年生）
（やじま いわお・神戸学院大学人文学部）